

伊豆と日本画の、
深いつながりを探します！



上原美術館(下田市)の伊豆市共同企画展「伊豆をめぐる名画—横山大観、安田靉彦を中心に—」後期がきょうスタートする。鬼頭里枝アナウンサーがこのほど同企画展を訪れ、見どころや日本画家と伊豆・修善寺との深いつながりを学んだ。
(企画・制作/静岡新聞社地域ビジネス推進局)

名画とともに

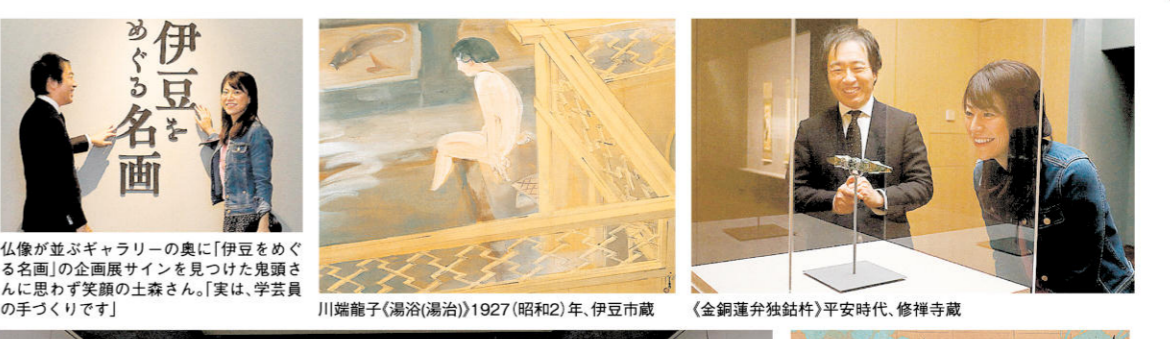
美しく険しい景観
古来、修行や湯治の場に

下田の山あいにはたえず上原美術館。仏教館と近代館の二つの建物があり、鬼頭さんはまず、仏教美術を収蔵する仏教館へ。同館主任学芸員の土森智典さんが案内してくれた。

企画展のプロジェクトは、伊豆半島の歴史。自然がつくり出した美しく険しい景観は、古くから神秘的に捉えられ、仏教の修行の場となってきた。木造の不動明王坐像は旭滝に隣接していた瀧源寺(ろうげんじ)に安置されていたとされる。静岡の仏像としては珍しい平安時代(10世紀)のもので、後の時代の作品に見られる繊細さとは異なる、がっちりとした姿に目を奪われる。

「1千年も前のものが残っているのはすごい。伊豆にはまだまだ知られていない仏像もたくさんありそうです。ねと想像する鬼頭さん。」

修善寺には、弘法大師が独結杵(ごごしよ)で岩を叩いたことで温泉が湧き出たという伝説がある。修善寺の裏山から出土した平安時代の独結杵は、古来修善寺の温泉が霊的なものとされてきたことを物語る。江戸時代、湯治場として栄えた修善寺の様子



仏像が並ぶギャラリーの奥に「伊豆をめぐる名画」の企画展サインを見つけた鬼頭さん(左から)と土森さん。[実は、学芸員の手づくりです]

川端龍子(湯治)1927(昭和2)年、伊豆市蔵

(金網蓮弁独結杵)平安時代、修善寺蔵



仏教館の展示(作品は前期のもの)



速水御舟(手向)1913(大正2)年、伊豆市蔵



安田靉彦(鴨川夜情)1934(昭和9)年頃、伊豆市蔵



(左から)安田靉彦、相原沐芳、初代中村吉右衛門。1909(明治42)年、新井旅館

伊豆の魅力堪能

を今に伝える歌川広重の浮世絵は「旅行客のような人がたくさん。雰囲気は今と似ていて、面白いですね」

旅館の主が結んだ
修善寺と画家の縁

この角で、鬼頭さんが一枚のモノクロ写真を発見。「みんなカッコいい!」1909(明治42)年、修善寺の新井旅館で撮られた写真に写るのは、旅館の3代目主人・相原沐芳(もくほう)、日本画家・安田靉彦(あいでん)の3人。当時、初代中村吉右衛門の3人。当時、いずれも20〜30代だ。沐芳が友人の靉彦を招いたことが、修善寺と日本画家とのつながりが生まれたきっかけです(土森さん)

自身も日本画を学び、芸術に対する深い理解があった沐芳は、肺を病み奈良からの帰京を余儀なくされた靉彦に、修善寺での静養を勧めた。やがて、友人の今村紫紅や広瀬長江、小林古径、前田青峯ら同門の若手画家も修善寺を訪れて靉彦、沐芳らとの交流を深めた。

また明治末期には、横山大観も療養のため修善寺を訪れ、沐芳との縁が生まれたという。1930(昭和5)年、新

井旅館で大観らの渡欧壮行会が開かれた際の写真には、修善寺で交流を重ねたそうする画家が並ぶ。こうした交流をきっかけに新井旅館に寄せられた作品などが、後年修善寺町(現伊豆市)に寄贈され、今回の展示に至ったという。

多彩な表現技法
日本画は「ジワる」

続いて、いよいよ名画のご対面。照明を抑えた落ち着いた雰囲気のある展示室で、「先ほどまでと全然雰囲気が違いますね」と鬼頭さん。仏教館には、靉彦らが20〜30代で手掛けた作品などが並ぶ。土森さんが「当時の日本画家は、西洋画の技術を吸収しながら伝統的な題材に帰する、新しい表現を模索していった」と解説する。のちに大家となる作家たちが、のびのびと描いた作品を鑑賞する鬼頭さん。「細かいなあ」「若いのにすごい」と、才能や個性がほとばしる作品の数々に興味津々の様子だった。

関連イベント

ミニ講座「伊豆をめぐる名画」
学芸員の土森さんが、本展覧会の見どころなどを紹介する。

開催日時 12月14日(土)13:30~15:00 会場 会議室

参加方法 名前、住所、電話番号、参加人数(2人まで)を明記し、ハガキまたはメール(info@uehara-museum.or.jp)で申し込む。予約制、定員30人(先着順)。要入館券

学芸員による作品解説

開催日時 12月21日(土)11:00~14:00(いずれも約40分間)

参加方法 当日、仏教館に集合。要入館券 会場 展示室

若き画家が愛した
修善寺の魅力今も

上原美術館の見学を終えた鬼頭さんが次に向かったのは、日本画家たちが交流を深めた伊豆市修善寺。桂川の深さや独特の湯の位置など移り変わりはあるものの、癒やしを求めて多くの人が訪れ、ゆったりと時間が流れる様子は当時と同じ。この雰囲気は、後に大家となる日本画家たちののびのびとした表現を育んだんですね(土森さん)

ケースは、今回の展覧会のために用意したもの。近寄って、筆使いの細やかさに見入ったり、部屋の中央に置かれたソファに座って、見え方の変化を楽しんだり。じっくり作品の魅力堪能できる。中でも鬼頭さんが注目したのは大観の作品。おらかな表現で見ると癒やしたかと思えば、墨色で山あいの緑を表現する技量で圧倒してみせる。「同じ人と思えない」と鬼頭さん。「日本画って、「ジワる」面白さがありますね」と、すっかり魅了されたようだ。

京さんは、沐芳について「絵画だけでなく芝居にも通じ、よく宿泊客と会話を弾ませていたそう。画家たちは、沐芳との芸術談義を通じて、新しい着想を得たのでは」と紹介してくれた。当時の日本画家たちは、修善寺を訪ね、山の小道を歩いて思案にふけり、仲間たちとの会話を花を咲かせていたのでは。鬼頭さんは、現代に整備された「竹林の小径」を歩きながら思いをはせた。締めくくりに修善寺の宝物殿も見学し、伊豆と仏教、芸術の深い結びつきを、改めて実感した様子だ。



原京さんに話を伺う。背景には新井旅館

修善寺山門では、平安時代の仁王像をいつでも見ることができる

竹林の小径

昨年引き続き上原美術館を訪れ、改めて、ゆったりと時間が流れる伊豆の魅力を感じました。近代館の屏風は、ソファに座ってじっくり見るのがおすすめです。

見学を終えて

伊豆市共同企画展

伊豆をめぐる名画

— 横山大観、安田靉彦を中心に —

2019年 10月12日(土) — 2020年 1月13日(月・祝)

前期 | 10月12日(土) — 11月24日(日)
後期 | 11月27日(水) — 1月13日(月・祝)
会期中無休

東洋と西洋の美の出会い
上原美術館
Uehara Museum of Art

開館時間 午前9時—午後5時(入館は午後4時30分まで)
入館料 大人1,000円/学生500円/高校生以下無料
* 仏教館・近代館の共通券です
* 団体10名以上は10%割引

〒413-0715 静岡県下田市宇土金341 Tel. 0558-28-1228
www.uehara-museum.or.jp

横山大観《神州第一峰》(部分)昭和5(1930)年、伊豆市蔵



後期 展示作品